

【学位論文審査の要旨】

【目的】

本論は、中国における所謂「村落社会」の文化的存立が国家による統治との関係においていかに成立し得てきたかを、主に歴史、宗族、祭祀の領域を中心に検討する試みである。

まず、中国の村落は日本の村落のような「場」の共有に基づく凝集力で個々人を拘束する組織体ではなく、状況に応じて様々な形態と範囲をとりうる共通項をもった「類」としての結合の結果、ないしは総体だと捉えられうるという前提を置く。こうした村落社会を国家との関係において捉える場合、歴史的には、国家と村落社会は徴税以外の側面では最低限の関わりしかもたなかったとされている。他方、1949 年以降の中国社会を対象とした議論では、国家権力がかつてないほど村落社会の隅々にまで浸透していることが自明視されてきた観がある。しかしながら、村落社会における儀礼的实践などを現地で観察する限りにおいては、それらは必ずしも国家の厳しい統制下にあるわけではなく、統治原理に著しく抵触しない限り、相対的な自律性を享受していることも多い。これらを踏まえ、国家によるヘゲモニーや統治システムとは別次元で作用する文化的な領域が村落社会にあると仮定し、こうした領域を「生成的自治」が作用する領域と呼ぶことにする。

本論は、中国における末端の村落社会において、この「生成的自治」が作用しうる諸条件を同定しつつ、国家と村落社会とのある種の双務的な関係性について論じることを最終的な目的とする。

【目次】

序章 問題の所在

第一節 本論の目的

第二節 中国における国家と社会をめぐる議論

- 1 村落社会という範疇
- 2 自律的な場としての社会
- 3 浸透論と遊離論
- 4 中国共同体論争
- 5 中国社会研究における国家—社会という枠組みと本論の位置づけ
- 6 中国における宗教の位置づけ
- 7 共産党による末端までの権力支配とその限界

第三節 C 村の位置づけ

- 1 行政的な位置
- 2 村落類型論からみる C 村
- 3 自然村と行政村の境域の一致
- 4 宗族
- 5 祭祀圏

6 村落内の重要なアクター

第四節 本論の構成

第一章 潮汕地域の歴史と文化表象

第一節 はじめに

第二節 広東地域研究における潮汕の位置づけ

第三節 地域史からみた潮汕

第四節 「潮汕」に対する文化表象

第五節 小結

第二章 宗族の形成と村落社会の変遷

第一節 はじめに

第二節 地域社会発展の過程と宗族

1 潮汕地域開発の歴史

2 潮汕地域における宗族の形成

第三節 C村陳氏にみる宗族形成の過程とその背景

1 明清時代の地域社会とC村における村落社会の形成

2 C村陳氏による宗族の形成

3 C村宗族形成の要因

4 民国期のC村

第四節 小結

第三章 移住伝承からみる宗族の形成とエスニシティ

第一節 はじめに

第二節 C村の移住伝承

第三節 潮汕地区における正統文化と先住者

1 潮汕文化

2 潮汕地域における先住者

第四節 C村におけるエスニック・ラベルの歴史的変容

1 C村の宗教

2 祠堂の建設

第五節 エスニック・ラベルの歴史的変容

1 歴史的変容

2 現在におけるエスニック・ラベル

第六節 小結

第四章 宗族の復興

第一節 はじめに

第二節 中国東南部の宗族復興に関する研究

第三節 C村の宗族組織と族譜の編纂

- 1 C村の祠堂と宗族の現況
- 2 C村における族譜編纂の契機
- 3 族譜の内容と編纂過程

第四節 社会的アイデンティティを付与する装置としての族譜

第五節 小結

第五章 台湾南部屏東県における移民社会とC村

第一節 はじめに

第二節 台湾南部屏東県における福佬・客家関係

第三節 台湾の客家運動と文化的資源としての民間信仰

- 1 台湾の客家運動
- 2 文化資源としての昌黎祠

第四節 台湾屏東佳佐地区陳氏のエスニックな自己意識

- 1 台湾佳佐地区陳氏一族の移住の歴史
- 2 佳佐における三山国王信仰
- 3 客家と福佬

第五節 社会的経験としてのエスニック・アイデンティティと文化資源

第六節 おわりに

第六章 農村社会と「国家」言説

第一節 はじめに

第二節 農村社会と「国家」言説

- 1 農村社会とギャンブル
- 2 老人組の役割
- 3 共産党をめぐる国家言説

第三節 準拠枠としての国家

第四節 小結

第七章 廟での祭祀と村落社会

第一節 はじめに

第二節 C村における元宵節の儀礼

- 1 元宵節とC村

2 游神儀礼の実施主体としての「老人組」

3 游神の過程

第三節 考察

1 比較の視点からみる C 村の游神儀礼

2 相対的権力不在状況下の民俗宗教

第四節 小結

終章 自律領域としての村落社会—歴史・宗族・祭祀—

第一節 国家と村落社会

第二節 中国社会における自律性

第三節 村落社会の文化的存立と統治

参考文献

【要旨】

本論では、村落社会の文化的存立が国家による統治の間でいかにして行われてきたかを、主に歴史、宗族、祭祀を中心に検討してきた。

序章では、中国における国家と社会に関する議論を整理した上で、村落社会の自律性がいかにして担保されているか解き明かすための枠組みを提示した。まず本論における村落社会の範疇を「類」的原理として整理した。中国の村落は日本の村落のような「場」の共有を前提とし凝集力を持って個々人を拘束する集団ではなく、状況に応じて様々な形態と範囲をとりうる共通項をもった「類」としての結合の結果、ないしは総体だと捉えられるとした。そのため、行政村としての村落を超えて広がりを持つネットワークでもある。このような村落社会を国家との関係から捉える場合、歴史的には国家と村落社会は徴税以外の側面ではほとんど関わりをもたなかったとされている。しかし 1949 年以降の中国社会を対象とした議論では、国家権力がかつてないほど社会に浸透していることが前提とされている。国家による社会の管理と、社会の側にいる人々の営為を軸として議論が展開されており、さらに国家と社会の間の様々なアクターが相互交渉を行う多様なプロセスとして理解されてきた。しかし、人々の日常的な営為は必ずしも抵抗や交渉といった言葉で表現することができないものであり、村落社会における宗教実践などは必ずしも国家の厳しい管理下にあるわけではない。これらを踏まえ、国家によるヘゲモニーや統治システムとは別次元で作用する自律的領域が村落社会にあるとみなし、こういった領域を「生成的自治」が作用する領域と呼んだ。この場合の「生成的自治」とは、中国における社会集団の構成原理の特徴である「類」的結合に基づく自生的な村落における自治を指す。これに覆い被さるのが共産党政権以降に展開された「構成的自治」であり、行政による村落の再編や統治を指している。この両者の間である種の均衡状態が生まれた時に、村落社会の自律性が担保され、宗教や儀礼、祭祀等に関わる活動が活潑になりえる。この枠組みを用いた分析

は、終章で再度行った。

第一章では、潮汕地域の歴史について明らかにした。広東地域研究において潮汕は広府、客家とともに「広東三大民系」の一つとされている。これらの特徴は、中華文明の中心地である中原に文化的起源を求め、自らの正統性をそれぞれが主張していることである。歴史的な観点から潮汕地域を特徴付ける点は、過剰な人口、防御性の高い住居や宗族組織の存在、村落間の武力衝突である械闘の頻発等であり、これらは生存競争の激しさを表している。また潮汕に関して、他の民系との差異を強調し、それを肯定的に評価する文化表象を取り上げ、かれらに対するステレオタイプとこういった文化表象の問題点を指摘し、地域社会の文脈を把握した上で、文化表象の裏側にある歴史的背景や政治性を読み解く必要があることを指摘した。

第二章では、村落社会の変遷を宗族が形成された過程と重ね合わせながら議論していった。潮汕地域では、遷界令が解かれた後の 17 世紀末から陸続と宗族が形成され始めた。その背景には国家による糧戸帰宗という戸籍・税に関する制度があり、これが村落社会における宗族組織の形成を後押しした。C 村もその例外ではなく、18 世紀中葉から宗族組織を形成し、付近の村落との争いを優位に進めるために他の宗族との系譜関係を構築したと歴史伝承を通じて主張している。民国期においても伝統的な村落同士の対立軸を継承し、共産党と国民党に分かれ近隣村落と争いを繰り返した。

第三章では、移住伝承から C 村の人々の宗族形成過程におけるエスニシティの変遷を明らかにする。C 村では、宗族の創始者である開基祖は明代に海南島から移住し、移住の際には妻方居住婚を通して村で生活する基盤を形成したとされている。ここで彼らが祖先の妻方居住を強調する理由は、自らの祖先が中原に連なる正統な人物であること、先住者のような科挙の受験資格を持たないものではなく、潮汕文化における文人文化に位置づけられることを主張する必要があったためであった。しかし彼らの信仰をみると、C 村宗族の形成初期である 18 世紀後半に祖先に関する伝承が成立した可能性が高いことが窺えた。本章では、妻方居住という文化的実践を通して、宗族形成の際に過去の族譜の編纂者が自らの来歴を外来者とすることによって、エスニック・ラベルを貼り替え、文化的正統性を主張する戦略を行ってきたことを示した。そしてこういった戦略は、単に国家から押しつけられた制度を受け入れたのではなく、資源獲得競争に勝ち残るために自他を区分し、正統性を獲得する過程で村落住民が積極的な意味づけを行った結果であると述べた。

第四章では、C 村における宗族復興現象を取り上げ、宗族が人々の現実において意識されるようになっていく過程について明らかにした。C 村では、2005 年から一族の系譜を記す族譜という出版物の編纂事業が始まったが、途中から台湾側の親族がその編纂事業に加わ

ることになった。この族譜が宗族復興に果たす役割に本章では注目した。台湾側にとって重要であった一族の歴史を記すという行為は、大陸側 C 村の族譜編纂事業に相乗りしたものであった。このような過程を経て出版された族譜は、政治的色彩を一定程度排除したものとなり、両者の社会的アイデンティティの構築という部分が前面に出ていた。この点で大陸側・台湾側両者ともに文脈は異なるが、自らのルーツを確認し、人と人との紐帯を生み出すことを希求する共通の目的を果たすことが可能となった。そして族譜編纂事業においては、これに関わった老人が宗族や伝統文化の領域において共産党組織とは別の権威を保持している可能性を示した。

第五章では、C 村から台湾への移住者の子孫たちのエスニックな自己意識について取り上げ、社会的経験によって閩南系方言話者（潮州語も含む）である福佬という認識を獲得していく過程について明らかにした。韓愈や三山国王などの信仰は、一般的に潮汕系特有のものだとされることが多い。しかし、台湾南部屏東県では、これらは客家系の人々によって信仰されている。これに対して台湾南部屏東県陳氏一族は族譜において「三山国王を祀る廟があったとしても、それがすぐに客家村落であることを示す指標にはならない」と反論を試みている。こういった背景には、近年の客家文化運動により、本来曖昧であった文化的要素の境界を明確にしようとする動きがあった。また、過去には清朝政府による分割統治政策により、かれらの集団間の差異が顕在化させられ、1970 年代まで日常生活の経験の蓄積に基づいた福佬と客家という自他認識が存在した。ここから国家による政策が人々の社会的経験と自己意識に大きな影響を与えていること、しかし一方で、それが実際の経験と重なり合い現実味を帯びてくるかどうかは一樣ではなく、政策と日常生活の経験のせめぎ合いによってエスニックな意識が紡ぎ出されていることを明らかにした。さらに、このような台湾陳氏の歴史への関心や自己アイデンティティを求める動きが C 村の歴史意識の高まりをもたらし、海外の親族とのネットワークによって、伝統文化を持続させる原動力になっていることも指摘した。

第六章では、「国家」言説を通して C 村社会における国家—社会関係を明らかにした。C 村住民は中央政府や官僚、共産党などに言及する際に、しばしば「国家」概念を用い相手を批判したり、村の共産党幹部をあるべき理想の政治家と比較したりする。この場合、国家や中央政府は、村民が村落内において対立関係にある対象に対して用いる概念であった。つまり、「国家」概念は一種の準拠枠として、村民にあるべき倫理的な規範を提供している。したがって、こういった場面では中央政府は村民に批判される対象とはならない。「国家」言説は、村落内の組織や個人にとって、自身の意見を正当化するための利便性の高い枠組みとなっている。ここでは、その場その場で彼らの立場や都合に合わせ運用されている概念が「国家」と捉えた。

第七章では、廟での祭祀からC村の社会関係を明らかにした。民俗宗教研究においても、国家―社会関係の議論は主流となっているが、多くの先行研究では国家の権力の浸透や権力の再生産、いかにして国家権力を民衆が利用するかといった現象が取り上げられてきた。それに対して、C村の小規模な祭祀組織である「老人組」は、領域としての祭祀の場において権力が相対的に空洞化された形で残されたため、国家権力とのポリティクスとはほとんど関わりを持たずに活動を持続している。それゆえ、C村老人組は大きな経済力も圧倒的な権威も保持していないが、祭祀を管理・運営する組織として一定程度の裁量を確保している。結果としてC村では、村民委員会は老人組を通さず直接村落社会を管理し、他方で老人組は元宵節をはじめとした年に何回か開催される伝統的儀礼の際に主導的な役割を果たすことにより、村落社会の団結心と自己認識の基盤を提供し村落の安定を保つ役目を果たしており、このことが逆説的にC村における老人組の自律性に寄与していたことが明らかになった。

終章では、村落における従来からの自治作用（「生成的自治」）と行政による村落の再編および村落組織の持つ国家支配の代行的作用（「構成的自治」）があること、村落社会にとって重要なのは、構成的自治の力を借りながら、いかにして生成的自治の作用を発揮できるかであることを確認し、村落社会における自律的領域はいかにして担保されてきたのかを考察した。政府は近年、伝統的な年中行事を国民の休日とするなど、宗教に対して寛容な政策を実施する一方、いわゆる「邪教」とみなす宗教に対する激しい弾圧も行っている。国家は村落レベルでの宗教をグレーゾーンとして位置づけており、国家に利益もたらすわけではないが、禁止するほどでもないという点で国家の政策の対象となりづらい。中国共産党の公的イデオロギーにおいては、国家の利益に直接的に結びつかない限り、宗教や儀礼は積極的に関与することを奨励されるものではなく、必然的に行政上の下部組織としての村民委員会や党支部もまた、それが地方財政に寄与することが明らかなケースを除いて、その奨励に積極的に携わることはない。また、たとえ関わろうとしても、祭祀は宗族を基軸とする歴史や人間関係と深く絡み合っており、若年層がそこで主体的な役割を果たすことも難しい。一方で、こういった宗教活動への抑圧が過度である場合、人々の心理的な離反を助長する可能性もある。そのため、新たな権力の温床となるような運動につながらず、既存の権力を脅かさない限りにおいて、領域としての祭祀の場は残存した。

また、C村は、党支部と村民委員会の職務が兼任されており、「党政」が一体化している村落である。くわえて特徴的なのは、いわゆる自生的な集落としてのC村と行政村としてのC村の領域が一致していることである。生成的自治の作用が働く単位が集落であり、集落を中心に村民委員会が置かれたことで、C村が凝集力を発揮しやすい形として残ることになった。特に宗族に関わる活動にとって、村という単位が凝集力を持続することができたかどうか重要な点になる。C村における宗族の活動や本論で論じた族譜の編纂過程において、編纂者が村民委員会よりもイニシアチブを取ることができ、宗族としてのまとまりを

保つことができているのは、行政村＝C村という単位が統合されているためであった。

村落レベルで実際に機能している権威システムについて見ると、族譜の編纂事業や老人組の役割、廟での祭祀の実施状況において、党支部および村民委員会だけではなく、族譜編纂事務や廟での祭祀に関わる老人たちが権威を保持していたこと、祭祀の実施における村民委員会の後景化（村民委員会はあくまで行政組織であり、儀礼時に安全管理は行なうが、祭祀の実施には直接関わらない）、族譜の編纂における政治性の捨象、国民国家の圏域とは別次元で意味を付与される移民（台湾の親族）を含んだ宗族の存在が文化的存立を担保する要素としてあった。このような伝統文化に関わる領域における裁量の拡大は、政府のさじ加減一つで変わりうるものでもあるが、1949年以降、村落社会における自律性は拡大と縮小の間を行き来してきた。その中で、筆者がフィールドワークを行って時点におけるC村は、政府による生成的自治の推奨、宗族の活性化、族譜の編纂、老人組と村民委員会の相互不可侵領域の確認等を通して、文化的領域における自律性が確保しやすい時期であり、このような諸要素の重なり合いの中で自律性が観察可能であったと結論づけた。

【博士論文審査結果要旨】

本論文について、審査員が高い評価を与えたのは以下の3点である。

1) 長期に亘るフィールドワークの実施に基づくデータの厚みと独自の分析視角

筆者は、広東省潮汕地区という人類学分野での先行研究が相対的に手薄でニッチな位置づけを持った地域に着目し、同地区に位置するC村に長期間に亘って通い、現地の人々と一定の信頼関係を築いたもののみがアクセスを許される資料を多く入手することに成功している。まずこの点のみをとっても本論は非常に貴重なエスノグラフィとしての性格を持つ。また、そうした調査の過程で断片的な族譜（宗族の系譜を記した資料）を集積してその全体像を再構成することを試みると同時に、族譜の編纂にまつわる政治性を看破し、現在の村人たちが宗族を代表する正当性を主張するためにかつてエスニック・ラベルの貼り替えを行った蓋然性を論理的に導き出している。このときに興味深いのは、これが単に有力な宗族に來歴を収斂させるための族譜の操作ではなく、特定の宗族に事後的に重要性を付与する過程を経ているという指摘である。

2) 系譜的連続性の認識／創出にまつわる超国家的な様相の描写

いまひとつは、筆者がC村から台湾への移住者の子孫たちのエスニックな自己意識について取り上げ、人々が、閩南系方言話者（潮州語も含む）である福佬という認識を「客家」との相対的な差異にまつわる認識とその語りのなかで獲得していく過程について明らかにしたことである。C村を故地とする台湾在住の福佬らが、故地に廟をつくり祭祀を執り行うことで海（あるいは国）を跨いだ系譜的連続性を確認する作業は、少なくともこれまでは国家の介入を受けることなく成立してきている。筆者は、それが過度に宗教性を帯びない限りにおいては、あくまで広義の「文化」として扱われる（べき）ことが、村落社会と国

家との敢えて「語られない合意」であることを巧みに示している。

3) 文化的存立が生成するメカニズムの同定

3点目に挙げられるのは、筆者が、村落レベルでの政治的な諸判断がなされる仕組みとプロセスについて詳述することで、宗族、祭祀、歴史認識といったアイデンティティの客体化にまつわる領域が、いかに国家行政からの相対的な不可侵性を生み出しえたか（＝生成的自治）を明らかにしたことである。C村は、党支部と村民委員会の職務が兼任されており、「党政」が一体化している村落であるがゆえに、委員（党員）である村人は、宗族の中心メンバーである長老格の村人と対峙する際、少なくとも「伝統的領域」については一定の譲歩を行わざるをえないことが多い。筆者は、このような領域に応じたヒエラルヒーの反転こそがC村の文化的存立を可能たらしめていると説得力をもって論じている。

一方で、審査の過程ではいくつかの疑義も投げかけられた。議論が最も集中したのは、本論が中国研究、中国地域研究の枠組みを超えて、普遍性や汎用性を持った人類学的な議論としてどの程度成立しうるかという点である。国家と地域社会、国家とマイノリティの関係性を問う人類学的な研究は数多あるが、それらがディシプリンとしてはあくまで人類学を謳うのは、そこから得られる知見が地域や国家を越えた還元性を一定程度持っているという自負に裏打ちされているからである。それに対し、本稿における生成的自治の成立もしくは村落社会の文化的存立にまつわる知見の射程は、極めて限定されているのではないかという指摘が審査員からはなされた。その延長線上で、「械闘」といった極めて中国的な概念が分析概念としても頻用されていることが、議論の幅を狭めてしまっているという指摘もあった。

また、筆者の言う「生成的自治」や「文化的存立」は、村落社会の文化的な自律が国家からの一切の政治的な干渉を排除していることを意味している訳では無論なく、あくまで国家による強い統治と表裏一体のものである。したがって、限定的な領域における相対的な自律性をもって、国家統治の末端における浸透性を主張する既存の議論へのアンチテーゼとするのはいささか早計ではないかという見解も述べられた。そして、この疑義は審査の過程においても完全には払拭されなかった。

こうした若干の難点は残るものの、全体としての本論の意義を損なうものではない。本論が、貴重なエスノグラフィであると同時に、中国の村落社会にまつわるイメージとしての政治的拘束性と硬直性に風穴を穿つ良質な議論を展開していることについては審査員全員が意見の一致をみている。また、議論を中国国内のみの事例に留めず、台湾という触媒的なファクターを介在させたことで、今後の理論的展開にも意味のある余地を残したことは高く評価できる。したがって、博士論文としての十分な水準に達していると判断するものである。

【審査結果】

本論文の公開審査は、2018 年 5 月 14 日（月）の 16 時 00 分から 18 時 00 分にかけて、5 号館 4 階の 423 室で行われた。論文提出者は、審査員によるあらゆる角度からの質問に精度の高い議論で応え、あらためて高い学術的能力を持つことを証明した。審査委員は、全員一致で横田浩一氏に博士（社会人類学）の学位を授与することが適当であると判断した。